

理系女子への キャリア メッセーヅ

「低くてもいいから、飛び続けよう」
諦めなければ、道は拓ける



1875年（明治8年）に前身となる東京女子師範学校が設立され、2015年に創立140周年を迎えたお茶の水女子大学。日本で初めての女性理学博士をはじめ数多くの女性研究者、教育者を輩出してきた同校は日本における女性教育の先駆けといえる存在だ。近年、頼に叫ばれる女性リーダー、グローバル人材の育成にもいち早くから取り組み、女性の活躍の場を広げてきた。研究者として第一線で活躍しつつ、現在はお茶の水女子大学の学長を務める室伏さきみ子氏に、理系女性のキャリアや活躍フィールドについて話を聞いた。

——室伏学長の女性研究者としてのキャリアについてお聞かせください。当時は女性の教育を取り巻く環境も現在とは大きく違ったのではないのでしょうか

幼少期から好奇心が強く、何でもやりたがる子どもでした。小学校の理科の先生が休日に理科教室を開いてくださり、一緒にゲルマニウムラジオを作ったり、化石採集に行ったり、考えることを重視する授業をしてくださったおかげで、自然科学への好奇心をかき立てられ、理系領域に関心を持つようになりました。当時は少なかった科学雑誌を夢中になって読み、「自然の不思議」に対する関心が一層高まっていきました。

キャリアについて振り返ってみると、中学校の理科の先生が全員女性だったことも影響が大きかったかもしれません。当時、世間では「女性と理科は縁遠いもの」という認識が一般的でしたが、間近に生き生きと科学を語る女性の先生がいらしたことで自分が進路を考える際に抵抗なく、興味のある理系分野を選択できました。

最初は教師になろうと思っていたのですが、大学で細胞生物学の研究にのめり込み、博士課程への進学を決意します。ところが、当時は女性の大学進学自体が1割程度の時代ですから、女性が博士課程に進む例は極めて少なかったのです。当時のお茶の水女子大学は

修士課程までしかなかったもので、東京大学の博士課程に進学したのですが、所属研究室での女性の受け入れは私が初めて。先生や先輩からも戸惑いながら私の扱いを相談した結果「女と思わないようにしましょう」という結論に至ったそうです（笑）。私は女子校育ちでしたから、自分で重いものも運びますし、設備の修理もやっていたので、特別扱いは必要なかったのですが、女性であることを意識せずに仲間として受け入れてくれたことは幸いでした。

その後は、博士課程在学中に結婚し、出産。主人のアメリカ留学が決まったので、8カ月の息子を連れて私もアメリカの研究所に留学することに。帰国後には

らしくて、母校のお茶の水女子大学に戻ってからは、自分自身のテーマで研究に取り組めるようになり、研究に没頭してきました。本音はそのまま研究三昧の生活をしていたのですが(笑)、女性の活躍をはじめとして大学や社会に対して貢献できる仕事も大切と考え、現在は学長として様々な活動に取り組んでいます。

——お茶の水女子大学における女性の活躍のための取り組みについて聞かせてください

本学では、世界の人々と協働し、様々な課題の解決に向けて取り組める「グローバル女性リーダー」の育成に力を入れています。具体的には、リーダーシップを育むための科目群を設置するとともに、グローバルリーダーシップ研究所を設立し、学生海外派遣プログラムの実施、リーダーシップに関するシンポジウム・講演会の開催など、多様な事業を行っています。

その他にも女性ビジネスリーダーの育成を目的とした『微音塾(きいんじゅく)』も実施しています。企業で管理職などの指導的な立場に就くことを目指す若手女性社会人を対象に経営学や組織マネジメント、リーダーシップなどをテーマにしたカリキュラムを用意し、次世代の女性リーダー育成を支援しています。女性の持つポテンシャルは大きいので、それを引き出して社会に貢献できる人材を育てていきたいと考えています。

——近年は政府や民間企業の間でも女性活用の機運が高まっており、労働環境の整備や制度の策定などが進んでいます

本学は設立以来、女性の活躍を支援してきたという背景もあり、子育て支援などにいち早く取り組むことで、女性研究者や学生たちを支援してきました。民間

企業や研究機関などで、そういった姿勢がさらに広がっていることは大歓迎ですね。

とはいえ、女性の活躍は制度や環境の変化だけでは不十分で、本当に難しいのは男女含めた社会全体の「意識変革」です。日本はまだまだ長時間労働が前提となっている。男性主導の職場が少なくありませんが、これは女性だけでなく男性にとっても幸福な環境とは言えません。女性だけが働きやすくても、男性が長時間労働では家庭の負担はすべて女性にしわ寄せが来てしまいます。男女を問わず人間らしい生活をするための重要性を社会全体が理解しなければ、少子化は止まりませんし、社会全体にとってマイナス。働き方に対する意識を変え、バランスの取れた生活をマネジメントできる社会を目指すことが大事と言えるでしょう。

——女性自身が社会で活躍していくために、どんなことを意識すべきでしょうか

一点は、もっと積極的にいろいろなことに挑戦してほしいということ。現状では良くも悪くも企業は女性に対して遠慮していて、女性自身も慎重な方が少なくない。企業側は、海外赴任や重要なプロジェクトなど、

優秀とはいえ女性に頼んでもいいのだろうか躊躇しているケースも少なくないのです。企業の担当者からそんな相談を受けることもありですが、私は「本人の意見を聞いてみてください」と答えています。依頼されてどうしても駄目なら断ればいい。でも、迷うのであればチャレンジしてほしい。自信がないからやめようというのは本当にもったいない。

細胞は軽度のストレスを与えると強くなるのですが、いきなり大きなストレスを与えると死んでしまいます。人間も同じで、失敗しないと強くなりませんし、失敗を避けるだけでは本当の壁にぶつかった時に立ち直れない。挑戦することが成長につながり、将来が拓けることもあるので、慎重になり過ぎずにまずは挑戦してほしいですね。

そして一番伝えたいのは絶対に「あきらめない」と。人生は山あり谷ありですから、谷のタイミングで諦めたり、逃げてしまいたいという気持ちになることもあるでしょう。ですが、諦めてしまつてはそれきりです。低空飛行でもいいので、飛び続けることが大切です。飛び続けさえすれば上昇気流に乗ることもありますから。

Profile



室伏きみ子

Kimiko Murofushi

国立大学法人お茶の水女子大学
学長

1970年お茶の水女子大学理学部生物学科卒業。1972年同大学院理学研究科修士課程修了、1976年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了、「真核細胞におけるDNAポリメラーゼ活性の調節」で医学博士。お茶の水女子大学理学部助手、講師、教授、理学部長、理事・副学長を経て2015年4月から現職。その間、ルイ・バスツール大学客員教授、日本学術会議会員、(株)ブリヂストン社外取締役など。